

会報

# 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 会発足10年を越えて . . . . . 丸山祐之
- 2 安曇建郡の頃に再度迫る . . . . . 百瀬新治
- 3 倉科のルーツを求めて . . . . . 倉科武久  
歴史は変わる! . . . . . 池田義光
- 4・5 目で見る10年史 . . . . . 金井透・小松宏彰
- 6・7 閑話・イスラエル人突然現れる . . . 平林厚美
- 8 私感 . . . . . 堀金隆雄  
ペルーに行ってみた . . . . . 平瀬孝子  
編集後記 . . . . . 松尾 宏

発行:安曇誕生の系譜を探る会 発行責任者:丸山祐之 編集委員長:本郷敏行 事務局長:川崎克之 〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3



## 会発足10年を越えて 会長 丸山祐之

「安曇誕生の系譜を探る会」は本年で10年となりました。会員の皆さまにはこの間、調査・研究、現地見学や講演会やお互いの意見交換を通して、様々な角度から安曇野の古代史にアプローチし、それぞれの考え、推論をお持ちになってきているのではと拝察しております。

考古学、文献史学また民俗資料の乏しいこの地域での古代史究明は困難を極めておりますが、皆さま楽しみながら参加されてこられたと思います。特に有力な手掛かりとなる遺跡、遺物については、専門家の方々に、まさに古代の掘り起こしを引き続き期待するところです。

ご承知の通り、安曇郡に進出してきた人々のルートや目的については諸説あります。日本海側からは二つのルートが考えられていて、その一つは姫川ルート（弥生時代にヒスイを求めて遡上、または6世紀中頃北九州の磐井の乱で敗走）、二つ目は信濃川～犀川ルート（弥生時代に稲作伝播の為に遡上、または6～7世紀頃鮭を追って遡

上）との説。また太平洋側のルートとして天竜川ルート（6世紀頃大和朝廷の命を受けて進出、または稲作の伝播ルート）が提案されています。他にも屯倉管理の為に蘇我氏の命により進出したという考え方もあります。最近で馬産地であった安曇野の馬が進出目的ではと考えられております。いずれのルート・目的であれ、安曇郡の建郡との関連の解明が待たれるところです。

一方、今後の研究の視点をもう少し日本列島全体また中国大陆や朝鮮半島の状況に広げていく段階ではないかという意見が会員の中に出ているように感じますし、大切なことではないでしょうか。

会は10年を経過しましたが、これからは安曇野の古代史のロマンの探求を超えて、ある程度の成果を次世代へ引き渡すことができますよう会の方向性を定めることも重要となってくると思います。皆さまには一層の活動を期待し、またお願いもするところです。



## 安曇建郡の頃に再度迫る

## 百瀬新治

安曇（郡）の誕生をどう捉えるか、おそらく会員個々でも種々考えがあろうかと思うが、安曇の名を冠した郡が成立したときこそが画期であるという点には異存がなからう。大和朝廷の律令体制が列島ほぼ全体に及び、科野（信濃）が安曇はじめ10郡に分割される、言いかえれば安曇郡が成立したのは7世紀後半のことである。この時期における安曇をもう一度整理し明らかになった点及び課題となる部分を再確認しておきたい。平成27年12月の当会講演「再び『安曇族』を考古学的にアプローチする」で弥生時代の状況についてまとめたが、今回は古墳時代を中心に直近の研究成果などを加えて述べる。

3世紀以来の古墳時代にあつて、安曇では6世紀に入るまで古墳がなかなか築造されず、集落遺跡も確認できていたものは限定的な状況にある。ようやく6世紀後半になり、安曇の西側山麓松川から穂高・堀金にかけて、100基程度古墳が群集墳（穂高古墳群）の形で構築され、対する東側山麓明科にも同時期から約20基の古墳が造られていく。両古墳ともに6世紀後半突如として多くの古墳を築き始め、穂高古墳群は遅くとも7世紀半ばまでに構築を終える。逆に明科では廃寺との関係が指摘される潮古墳群が7世紀後半に従来とは別の場所で構築が始まる。最大の謎であり課題になるのは、安曇郡が成立していく時期に穂高では古墳が築かれなくなり（追葬は続く）、明科廃寺創建と時期的位置的に強い関係をうかがわせる古墳が新たに築かれる点である。

明科の地で7世紀後半の時期に古墳と寺院が同時に建立構築されるという事実は、安曇郡の成立に非常に重要な関わりを持っている。岐阜県関市の弥勒寺官衙遺跡群において、同じ7世紀後半に古代寺院・郡衙（郡役所）・郡司居宅・古墳が隣接して構築される状態が確認されている。加えて、伊那郡衙比定地とされる飯田市恒川官衙遺跡においても、同様の古墳・寺院・郡衙のセットが明らかになりつつあり、明科での該期における古墳と寺院の同時造営は、近隣に郡衙の存在を強く想定させる。もう一点、明科北村遺跡では、周りに堀状の溝をもうけた縦穴住居と倉庫群らしき軒を並べる掘立柱建物を伴う集落遺構が発掘され、明科廃寺からほど近くに寺創建などを支えたであろう有力者が住まう有力なムラの存在が明確になってきた。

もちろん、明科と筑摩郡との所属関係は明確になつておらず、松本大村廃寺や筑摩郡衙は度重なる調査でもその存在が確定できていない等、明科の地や明科廃寺を即安曇郡衙に結びつけるには決定的根拠が希薄である。しかし、後に国府が置かれる筑摩の古墳や集落址の調査などから、状況証拠的に明科を筑摩郡衙とするには難しいと考える。廃寺の瓦供給源として安曇郡内桜坂古窯址が存在し、犀川を間に濃密な交流がわかってきた現在、7世紀代の安曇郡として北安曇に加え明科等犀川東岸の隣接地を含めて見直す状況になってきている。合わせて、大和朝廷の地方統治に向け国・郡が律令の中で成立する時期の古墳や集落遺跡を郡境等にとらわれず積極的に研究調査し、資料による客観的根拠をもって解明していく必要を強く思う。

次に、犀川を挟んで西側に対峙する旧南安曇郡の状況はどうであるかに触れていく。穂高古墳群は6世紀後半から群集墓として構築され、7世紀半ばまでに県下でも有数の100基を超える古墳が造営された。最近になり、古墳出土の象嵌装大刀が大和朝廷から下賜された品と提起する論考が出た。地方豪族の朝廷とのつながりを示す根拠資料とされるが、安曇では穂高狐塚3号墳（E6号墳）からも象嵌装大刀出土の記録が残る（資料は現存しない）。明治以前に穂高古墳群から出土した宮内庁所蔵の鳳凰形金銅製飾板と、豪華な副葬品で全国的に注目を集めた奈良県藤ノ木古墳出土の金銅製冠との酷似や穂高矢原馬場街道遺跡出土の畿内産土師器の存在も含め、律令制下の有力者（地方豪族）の実像を裏付ける資料が揃いつつある。

また、F9号墳石室内から出土した平安時代の馬の骨は、勅旨牧の猪鹿牧の当地設営の可能性を含む馬飼育の実態に迫る資料確認であり、明科における7世紀代の古墳と集落からも馬骨出土が相次いでいる。馬具の多出など信濃における全体的な状況に合致するが、安曇における軍事的な意味を有する牧場経営と馬飼育が、古墳時代以来継続されている可能性が高まっている。また、昨年穂高神社前（穂高支所用地内）で、7世紀後半の集落遺跡が発掘され、該期の集落群の範囲や穂高神社の起源との関係で一石が投じられた。このことは、水田可耕地の所在から穂高矢原付近に集落遺跡が展開しその墳墓が西山山麓に位置するという従来の想定に、開拓者の生業や朝廷との関係等より多面的な視点での追究を迫る資料提示となっている。

以上、最近の調査成果や論考を取り込んで、断片的ながら安曇郡成立期の考古学的な状況とそれに対する自己の所見をまとめた。”安曇誕生の系譜を探る”という会の研究活動に直結した課題として、歴史を解明する資料的裏付けに位置づけられ、系譜を探る会の今後における研究の手掛かりになることを期待する。

### 会員向け特別企画 参加者大募集！！

日時：10月29日（日）午前10時30分～

会場：豊科郷土博物館 2F特別展示室（入館料100円）

秋季企画展「古墳で考える 安曇のそもそも」

～安曇野市内古墳出土展～

後期展示は安曇野市内の古墳出土品中心の展示となります。当日は展示最終日となります。百瀬新治館長から会員向けにより詳しい展示の解説をしていただきます。

## 倉科のルーツを求めて 倉科武久

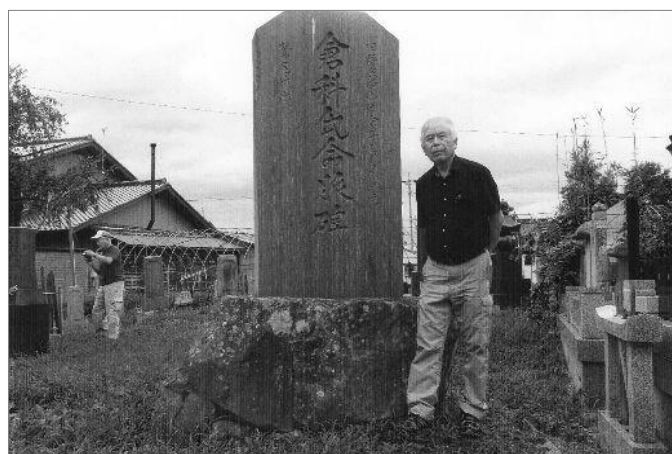
「安曇誕生の系譜を探る会」が今年で10年を迎える。私も倉科氏のルーツを調べ始めてから10年程になる。

倉科の氏名の発生は山梨県牧丘の倉科（武田信玄系図）と長野県千曲市の倉科（村上系図）、また清和源氏山形氏族に見える。千曲市の鷲尾城の城主は村上氏の主族「倉科源三郎」と伝えられ、京都九条城興寺領倉科庄時代の庄司であったといわれ、室町時代に荘園の廃退とともに村上氏が倉科氏の跡を継いだものか、詳しいことはわからない。村上顕国の次男義顕が倉科において倉科と称したとも伝えられている。

天文23年（1553）4月村上義清の葛尾城が武田軍により攻略され、また真田幸隆の調略により一重山の屋代氏をはじめ松代方面の豪族が武田に寝返ったことから、倉科氏は周囲の敵に抗すすべもなく安曇地方に敗走したという。「更科郷土を知る会ちょうま第34号」に記載されており、また地元には倉科姓は居ないとのこと。

安曇地方を調べれば何か浮かび上がるのではないかな？ そんな思いのさなかこの会があることを知り入会した。

昨年11月、突然千曲市の安藤洋さんから手紙が届いた。文面には、村上義清が武田信玄に敗れて越後に走って以降、義豊は安曇郡仁科に逃れ子孫は松本地方に散在するという記録があるが、千曲市千本柳に「倉科の命脈碑」が有りそこには「義豊一族の幼子が縣の庄船山の郷倉科の里に残り帰農して現在に至る」とあり、その末裔



倉科の命脈碑

の方にお会いしてきましたと書かれています。碑と碑文の写真も同封してあり、本当なのかと驚きました。

一方、山梨県牧丘の倉科には琵琶城があり、城主は武田家13世の主・武田安芸守信光の子で倉科治部少輔信広が応永年間（1394～1427）に築城したと伝えられる。近くの慶徳寺にある石碑の碑文には「延文年間（1356～1361）足利尊氏の家臣・倉科七良左衛門（琵琶城主）が現在地に四間四面の御堂を再建」とある。住職の藤科文衛さんによれば、武田氏滅亡後倉科一族はこの地を離れ倉科氏は居ないとの話でした。

現在松本市に住む倉科の名字を持つ家は電話帳調べではおよそ160軒程。私のルーツを探る旅はまだまだ続きそうです。

## 歴史は変わる！ 池田義光

歴史的事実や考察は確定したもののように実はそうではない。かつて私たちが知っていた歴史的出来事や考察も新しい史料や異物などの発見や研究の進展によって変わり、教科書が書き換えられるということも多々ある。今回はそのうち、原始時代や古代史から教科書が書き換えられたものをいくつか紹介する。

### 「縄文時代」のイメージは変わった！

かつての教科書では「採集・狩猟の生活で貧しく移住生活をしていた」と書かれていたが、今では「本格的な農耕の段階まではいかないが栽培も開始し、人々の生活は安定して定住も始まった」と変更された。

また水稻栽培の開始もかつては弥生時代からと書かれていたが、今では「縄文時代の終わり頃に九州北部で水田による米作りが開始された」と記述されている。

### 「大和朝廷」とは言わない！

かつての教科書では、古代日本を統一したのは「大和朝廷」と書かれていたが、今は「ヤマト政権」または「ヤマト王権」と書かれている。「大和」というのは奈良時代の呼称で7世紀までは様々な漢字が当てられていたので、音だけの「ヤマト」が適切であると考えられて

いる。また、「朝廷」は天皇の下での中央集権的な官僚制機構を持つ政府・政権のこととして、天皇号もなく律令制でもない連合国家のこの時代に当てはめるのは適切でないと考えられるようになった。

ちなみに、古墳が営まれた3世紀中頃から7世紀のことを、政権の中心が「ヤマト」にあったということで「大和時代」と呼んでいたが、今は「古墳時代」としか言わないようである。

### 「聖徳太子」も変わった！

現在の教科書では「厩戸皇子（聖徳太子）」または「厩戸王（聖徳太子）」と記述されている。「聖徳太子」というのは後代の呼称でこの時代には使われていなかったというのである。また、摂政という役職もなかったようである。推古朝の国政をリードしたのが聖徳太子と言われてきたが、今では推古天皇・厩戸王・蘇我馬子の3人の共同政治と考えられている。それに推古朝に行われた十七条の憲法・冠位十二階・遣隋使派遣・法隆寺建立もどれも聖徳太子の施策であるとの確証がないので、教科書では誰がやると書かずに推古朝の施策として記述しているものがある。さらに、お札の似顔絵になった所得大使は、8世紀半ばに描かれたもので聖徳太子と似ているという根拠がないと考えられている。



# 安曇誕生の系譜を探る会 10年の歩み



H20 勉強会説明会

## 平成19年 (2007)

- 2月26日 設立準備会発足
- 12月8日 設立準備会総会

## 平成20年 (2008)

- 1月26日 **設立総会**
- 4月 説明会 会の運営、勉強会など



H21 志賀島歴史研究会との交流



H22 穂高古墳群現地勉強会

## 平成21年 (2009)

- 1月25日 **第2回通常総会** 20年度決算
- 4月25日 **第3回通常総会** 会計年度変更勉強会
- 三郷村住吉庄開拓の歴史 金井恂氏
- 大町市域の古代史 島田哲男氏
- 5月9日 **志賀島歴史研究会との交流会**
- 7月26日 勉強会 集中講座1部・2部



H22 会報「安曇人」創刊号

安曇誕生の系譜を探る会 交流会報告

# A Z U M I

第1回 **安曇ゆかりの地との交流会**

テーマ **「安曇族のなぞ・いつ・どこから・なぜ…」**

【シンポジウム】  
 日時：平成22年7月24日(土) 13:00~16:00  
 会場：穂高会館講堂(長野県安曇野市穂高)

【安曇野見学会】  
 日時：平成22年7月25日(日) 9:00~12:00  
 会場：国営アルプスあづみの公園

主催：安曇ゆかりの地との交流会実行委員会  
 後援：安曇野市・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会  
 協賛：安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会  
 協賛：安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会・安曇野市観光協会

## 平成22年 (2010)

- 1月31日 現地見学会
- 穂高地域の弥生・古墳時代の遺跡 講師：山下泰永氏
- 4月25日 **第4回通常総会**
- 勉強会
- 「穂高神社について」 小平弘起氏
- 「安曇の歴史と穂高神社」 山崎佐喜治氏
- 6月 **臨時総会** (第1回交流会実施を決定)
- 7月24日
- 第1回安曇ゆかりの地との交流会**
- シンポジウム
- 「安曇族のなぞ」
- いつ・どこから・なぜ・・・



H22 安曇ゆかりの地との交流会

## 平成23年 (2011)

- 2月19~20日
- 第2回安曇ゆかりの地との交流会**
- シンポジウム
- 「安曇族のなぞ」
- いつ・どこから・なぜ・・・
- あづみ野風土舎公演 「八面大王」
- 4月23日 **第5回通常総会**
- (サミット開催決定)
- 9月24~25日 **全国安曇族サミット**
- 基調講演
- 「歴史から見た安曇族」
- 講師：井沢元彦氏
- シンポジウム
- 「あづみ族のなぞ」
- いつ・どこから・なぜ・・・



H22 明科地域現地勉強会

「あづみ・しか」全国ネット

# 2011

第2回全国集会 ◎統一テーマ「あづみ族の全国展開」

# 安曇族サミット

『あづみ族のなぞ・いつ・どこから・なぜ…』

【全国ネットミーティング】  
 9月24日(土) 16:30~18:00  
 【歴史シンポジウム】  
 9月25日(日) 9:00~16:30  
 【会場】  
 長野県安曇野市穂高会館



H23 全国安曇族サミット





H25 講演会「古代信濃における諸氏族と部民」

**平成24年 (2012)**  
 4月28日 **第6回通常総会**  
 9月8日 講演会  
**「発掘考古学から見た弥生時代の安曇野」**  
 講師：百瀬新治氏  
 12月14日 講演会  
**「古代信濃の国における諸氏族と部民」**  
 講師：福島正樹氏



H25 講演会「北村遺跡とその時代」



H25 講演会「発掘考古学から見た信濃」

**平成25年 (2013)**  
 5月25日 **第7回通常総会**  
 12月7日 講演会  
**「北村遺跡とその時代」**  
 講師：平林彰氏



H26 安曇族ゆかりの地全国交流会in 高島



H25 北信の古墳群現地見学会

**平成26年(2014)**  
 3月2日 部会発表会・懇親会  
 5月10日 **第8回通常総会**  
 10月24・25日  
 安曇族ゆかりの地全国交流会in 高島  
 12月13日 講演会  
**「弥生時代の松本平」**  
 講師：廣田和穂氏



H26 部会別発表会



H25 長野県歴史博物館見学会

**平成27年 (2015)**  
 2月22日 部会報告会  
 歴史部会・・・金井 透  
 氏族部会・・・古川幸男  
 ゆかりの地部会・・・金井 洵  
 4月26日 **第9回通常総会**  
 「仁科濫觴記考」勉強会スタート  
 講演  
**「再び安曇族を考古学的にアプローチする」** 講師：百瀬新治氏  
**「穂高神社の式年遷宮と大飾り物」**  
 講師：小平弘起氏

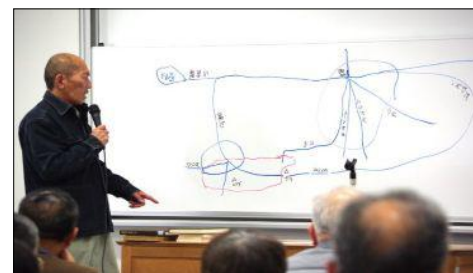


H26 総会後の懇親会



H29 「安曇氏族の興亡」勉強会

**平成28年 (2016)**  
 4月23日 **第10回通常総会**  
 安曇平の地域別調査・研究  
 地域別に5班編制でスタート  
 3月26日 講演会  
**「古代の安曇野に争乱はあった？」**  
 講師：島田哲男氏



H28 講演会「古代の安曇野に争乱はあった？」



H29 講演会「海の民の陸化をめぐって」

**平成29年 (2017)**  
 4月22日 **第11回通常総会**  
 創立10周年記念事業決定  
 講演「海人族の陸化について」  
 講師：巻山圭一氏  
 勉強会「安曇氏族の興亡」  
 月曜と土曜の2班編制でスタート



ある日の企画運営委員会



# 閑話 — イスラエル人突然現れる

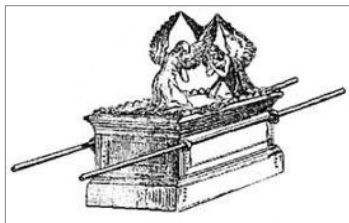
平林厚美

神さま、仏さま、キリストさまあ．．日本民族のこの多様性はなんだろう。最近日本に14年住んでいるというイスラエル人が突然事務所に現れて雑談をする機会がありました。日本とユダヤとの意外な共通点について説明をされたのでびっくり。一時ユダヤブームがありました。明治期に来日したスコットランド人が最初に提唱した日ユ同祖論（日本人とユダヤ人は共通の祖先ヤコブを持つ兄弟民族であるという説、ウイキペディアより）があります。今年6月女優の鶴田真由氏が「神社めぐりをしていたらエルサレムに立っていた」という本を上梓し、日本とイスラエルが繋がっているかもという刺激的な話があります。この摩訶不思議な関係は、日本の風習についてどのような伝承があったのか、夢を広げることになるかもしれません。

雑談したイスラエル人が説明してくれた内容を含めいくつかの共通点をご紹介します。

## ◆ モリヤ

諏訪大社上社は、本宮、前宮とも御神体は守屋山ともいわれます。イスラエルにモリヤという山とモリヤ通りもあります。『ヤ』は神の意、『モリ』は怖い、畏れ多いという意味になるようです。畏れ多い山を神と考えたのでしょうか。最近イスラエル大使ご一行が諏訪を訪問されたとか。



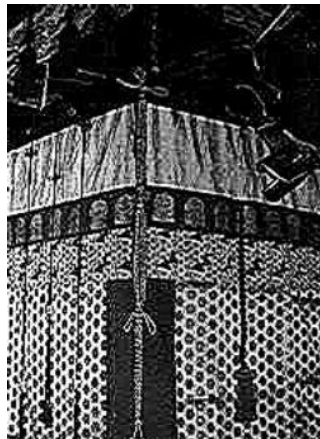
## ◆ 神輿

旧約聖書の「出エジプト記」に記載されているアーク（聖櫃せいひつ）とはモーセが神から授かった「十戒石板」を保管するための箱で、全体に黄金が貼られており、そのアークの作り方が克明に記され、日本の神輿（みこし）にそっくりといわれます。

金

## ◆ 京都の祇園祭り

ユダヤの「シオン（ZION）祭り」は、7月17日に行われますが、京都の「祇園祭り」も山車が街中に引き回され、祭りの最高潮となる日でもあります。Gion はZionの転訛であり、シオンはイスラエルのことを意味するとのこと。多くの山車の中には、日本に見られない文様があるようです。洪水が治まってノアの箱舟がたどり着いた日が7月17日と旧約聖書に書かれて、この日をお祝いするのがシオン祭りとなっています。



## ◆ 「えっさ」の意味わかりますか

イスラエル人に「えっさ」の意味をきかれました。お猿のかごやに「えっさ、えっさ、えっさほいさっさ」の歌詞があります。ヘブライ語で「えっさ」は「運ぶ」意味だといわれました。

## ◆ ユダヤのマーク「六芒星(ろくぼうせい)」



伊勢神宮の石灯籠に「六芒星」が彫られています。この紋は「ダビデ王の紋章」といわれ、ユダヤ人のシンボルになっていて、イスラエル共和国の国旗にも描かれています。

伊勢神宮の奥宮

に伊雑宮（いざわのみや）という神社があり、その昔鳥居の前にある石灯籠には、六芒星が彫られていたそうです。「イザワの宮」は「イザヤ」の「宮」である可能性があるというのです。「イザヤ」とは、紀元前8世紀にユダ王国で活躍したユダヤの預言者です。ちょうどアッシリアによりイスラエル王国が侵略された頃となり、国を出てシルクロードを渡り日本にたどり着いた可能性があるというのです。日本の国生みをしたイザナギもイザヤに由来している話もあります。イザヤとは、ヘブライ語で「神の救い」という意味を持ち、「ナギッ」とは君主を意味し、イザナギとは「神の救いの君主」「イザヤ王子」という意味になるといいます。



## ◆ 赤い鳥居

鳥居は、ヘブライ語アラム方言で「門」という意味があるそうです。モーセがエジプト脱出の前にヘブライ人が神の災いに遭わないように、玄関口の二本の柱と鴨居に羊の血を塗らせ、災いが静かに通り過ぎるまで家の中で待つように指示したのですが、これが赤い鳥居のルーツになっているとも言われます。イスラエルの地図上で見られる鳥居のマークはキャンプ場を表しているといえます。

◆ 相撲

旧約聖書には、イスラエル支族の父ヤコブが天使と相撲をとる光景が描かれ、ヤコブが勝ったことで「イスラエル(エルは神のことで、神と闘う者)」という名前を授けられたといわれます。現在イスラエル国内に「相撲協会」があります。

◆ かごめの歌の秘密と剣山(鶴亀山)

「かごめの歌」をヘブライ語に置き換えて読むと、「誰を守るのか、安置されていた神宝が取り出され、お守りの岩も焼かれ、見捨てられた」というような意味になる一方、お守りの岩を造りまた希望へ繋がる二つの意味があるとも。その場所が剣山(鶴亀山-徳島県)だということです。

◆ 失われた 10支族

聖書には、イスラエルを追われた 10 支族は主として東方に向かうという記述があるのだそうです。雑談をしたイスラエル人の説明によると、インドの方に一支族が発見され、その人たちは今でもイスラエルに戻ることができるといいます。

鶴田真由氏の著作の中で、日本人とユダヤ人の Y染色体の系統についての記載があります。日本人の約40%がD系統、世界中のユダヤ人グループに広くみられるのがE系統と同じ仲間、同一の先祖と考えられ、特に高い地域が沖縄の人で56%、アイヌ民族で88%だということです。このD系統を持つ民族は世界中でも非常に珍しく、日本人とチベット人が高率で持っているとの説明です。

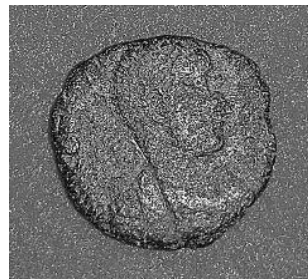
著作内で書かれているユダヤの歴史(旧約聖書の概要)

- \* 聖書の中の「旧約聖書」部分はユダヤ教の聖典
- \* ユダヤの民の神はヤハウェでユダヤ教
- \* 神による天地創造からアダムとイブが創られ、りんごを食べて楽園追放
- \* 二人の子孫10代目がノア(ノアの箱舟で有名)
- \* 紀元前1,700年頃、イスラエル民族の父祖・アブラハム(預言者)誕生
- \* 神ヤハウェの言葉を聞き従ってカナンの地へ移動、息子のイサク、孫のヤコブへと継承
- \* ヤコブは中年期に名前を「イスラエル」と改名、息子12人が「イスラエル 12 支族」の基礎へ
- \* カナンの地が飢餓に襲われ、12 支族の子孫たちはエジプトへと移住
- \* 約 400年間エジプトで奴隷
- \* 紀元前1,300年頃、エジプトにモーセ誕生
- \* モーセは神の啓示を受け、エジプトで奴隷をさせられていた12人の兄弟の後裔を連れてエジプトを脱出(出エジプト記)
- \* モーセはシナイ山にて神からの十の戒律を授かる(ユダヤ教の基礎となる十戒)

- \* カナンに戻り定住し、紀元前 10 世紀頃、サウルが初代王に即位、その後ダビデ、ソロモンと王位は継承
- \* ソロモン王の死後、ユダ族、ベニヤミン族はユダ王国に、残りの 10 支族はイスラエル王国へと分裂
- \* 紀元前722年、アッシリアによってイスラエル王国は制圧され、10 支族は世界に散らばり「失われた10支族」と呼ばれる
- \* 紀元前587年ユダ王国はバビロニアに滅ぼされ、イスラエル 2 支族はバビロニアへ連行
- \* 紀元前539年バビロニアがペルシャ帝国に征服され、イスラエルの 2 支族は再びエルサレムへと帰還
- \* 救世主イエス・キリストが誕生(以降は新約聖書)

◆ 中東、ローマとの関係を示す最近のニュース

ペルシャ人の役人の名前を記した 8世紀の木簡が出土した奈良市の平城宮跡近くで、外国人とみられる顔を描いた同時代の木簡が発見され、古代の仮面劇「伎楽(ぎがく)」で使われたペルシャ人の面に似ています。  
(2016年10月13日の新聞)。



沖縄県うるま市教育委員会の昨年の報告で、世界遺産「勝連城跡」の発掘調査で発見された銅貨4枚が3~4世紀の古代ローマ帝国のコインと判明しているようです。

◆ 日本語とタミル語の類似性

言語学者、大野晋(おおのすすむ)氏の古代日本語の研究では、南インドのタミル地方と古代日本の関係性があるということです。(ウィキペディアより)  
古代日本に様々な民族が集まっていて、そのことが今の日本人の多様性にも影響を与えたのでしょうか?すべての文化のルーツが中国や朝鮮から渡来しただけではないという気持ちになります。

<参考資料>

- 神社めぐりをしていたらエルサレムに立っていた (鶴田 真由)
- 日本とユダヤのハーモニー (中島 尚彦)
- <http://www.history.jp.com/>
- 日本とヘブライの共通点
- [http://inri.client.jp/hexagon/floorA3F\\_hb/a3fhhb0\\_10.html](http://inri.client.jp/hexagon/floorA3F_hb/a3fhhb0_10.html)



私 感 堀金隆雄

安曇野市へ転入して数年過ぎ、地域のことを何も知らず、これでは「マズイな」と思い始めた頃「安曇野検定」があることを知り、平成27年1月に受験しました。「接吻道祖神はどの地域にあるか」との設問が分からず、後日明科東川手の池桜へ現物を見学に行きました。つくづく何事も実物を自分の目で確かめることが大切であると痛感し、当時の人々がなんとおおらかな感性を持ち生活していたか解り、これがきっかけで地域の歴史に興味湧き、それまでスケールの大きい歴史ばかりに向いていた視線が地元安曇野へと変わりました。



ピラミッド時代、我が安曇野では平和に長生きしていたであろう縄文の人々が大勢住んでいたことを想像すると同時に、今日「核」も恐怖に脅えている現代人は近代文明こそ両刃の剣であると深く認識し縄文人に多くを学ぶべきではと思います。「人類の歴史とは“平和”の歴史である」となりますよう。

一方、かつて先進文化を吸収しようとして遣隋使や遣唐使などで中国大陸や朝鮮半島を訪れたようですが、現在はお隣の国でありながら大きな距離感のある関係となっています。狩猟民族と農耕民族の違いもあるでしょうが、このような状態は過去の歴史の流れを知ることで見えてくるものがあり、将来歴史として残るでしょう。

歴史の流れる数年前に区誌の編纂に係わったことがありません。当然先人がまとめてくれた村誌、町誌、郡誌を参考に作業を進めましたが、六十年前位からは自分や知人の記憶をたどって編纂しようと思いません。ところが、実際に作業を進めてみるといろいろ意見が出てきて、記述がまとまらないことが多くあり、如何に記憶があいまいであるかと認識しました。たった六十年前のことです。

一方、かつて先進文化を吸収しようとして遣隋使や遣唐使などで中国大陸や朝鮮半島を訪れたようですが、現在はお隣の国でありながら大きな距離感のある関係となっています。狩猟民族と農耕民族の違いもあるでしょうが、このような状態は過去の歴史の流れを知ることで見えてくるものがあり、将来歴史として残るでしょう。

歴史の流れる数年前に区誌の編纂に係わったことがありません。当然先人がまとめてくれた村誌、町誌、郡誌を参考に作業を進めましたが、六十年前位からは自分や知人の記憶をたどって編纂しようと思いません。ところが、実際に作業を進めてみるといろいろ意見が出てきて、記述がまとまらないことが多くあり、如何に記憶があいまいであるかと認識しました。たった六十年前のことです。

編集後記

松尾宏

ペルーに行ってみた 平瀬孝子

リマやクスコの都心部はスペイン人に制圧されインカの名残は石組み等、部分的に利用されている状況でした。インカの石組みは精巧で大小の石が隙間なく積まれ、地震でも崩れなかったそうです。マチュピチュは現地ガイドの流暢な日本語案内で、まずインカ道を少し登り、遺跡をみおろす高台にいきしばし天候待ち、霧が晴れて全体が見えた時の感動は、インカの時代に迷い込んだよう。遺跡の中は山の頂上の斜面に石積みの壁で分けられ、コンドルの神殿、太陽の神殿、儀式が行われたであろう石の日時計がある主神殿等巡る。主要な処のみ歩くから全部ではないがそこにある独特の空気を感ずる。石に苔が生えるので取り除く仕事もあるとか。ペルーのあちこちを観て、アフリカ原点の人類なのに大陸毎、地域毎にこうも違いがあるのかと感嘆した旅でした。



リマやクスコの都心部はスペイン人に制圧されインカの名残は石組み等、部分的に利用されている状況でした。インカの石組みは精巧で大小の石が隙間なく積まれ、地震でも崩れなかったそうです。マチュピチュは現地ガイドの流暢な日本語案内で、まずインカ道を少し登り、遺跡をみおろす高台にいきしばし天候待ち、霧が晴れて全体が見えた時の感動は、インカの時代に迷い込んだよう。遺跡の中は山の頂上の斜面に石積みの壁で分けられ、コンドルの神殿、太陽の神殿、儀式が行われたであろう石の日時計がある主神殿等巡る。主要な処のみ歩くから全部ではないがそこにある独特の空気を感ずる。石に苔が生えるので取り除く仕事もあるとか。ペルーのあちこちを観て、アフリカ原点の人類なのに大陸毎、地域毎にこうも違いがあるのかと感嘆した旅でした。

安曇誕生の系譜を探る会 創立10周年記念事業

記念講演 古代の海を巡る謎に迫る  
 <倭王権と臨海古墳>  
 講師 荻谷俊介氏

後援：安曇野市教育委員会・信濃毎日新聞・市民タイムス  
 協賛：穂高神社  
 日時：10月22日(日) 午後1時30分開演  
 会場：豊科交流学習センター きぼう  
 入場料：500円  
 申込：不要 先着120名

奥信濃弥生遺跡巡りの旅

多数の銅戈や銅鐸が出土した 中野市の柳澤遺跡、中部高地を代表する栗林式土器の名前の由来となった栗林遺跡、朝鮮半島との強い結びつきを示す木島平の根塚古墳など、信州を代表する遺跡を豊科郷土博物館の百瀬新治館長に同行解説していただきます。

日時：平成29年11月12日(日) 午前9時半～午後5時  
 集合：安曇野市 穂高支所駐車場  
 会費：3500円 (バス代・入館料・昼食代込み)  
 定員：50名 (最少催行人員35名)  
 締切：11月5日(日) 17時00分まで  
 申込：事務局・川崎 Tel.090-5779-5058